
正義の味方ハンサムボーイ

メグ・ローラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方ハンサムボーイ

【Nコード】

N8816B

【作者名】

メグ・ローラン

【あらすじ】

既に死亡した大天才の娘に忍び寄る悪の組織の魔の手。彼女の秘密を守るために正義の味方ハンサムボーイがどこからともなく現われ、陰ながら彼女を守る。そして最終的に悪の組織を倒す。はず。結末未定。

第1話 天才の誕生

ビューティフル・パパは、おかあさまのビューティフル・グランマのおなかから出てきたとき、ふつうの赤ちゃんのように「おぎゃあ」とは泣きませんでした。そんな平凡な、どこにでもいるような子ではなかったのです。

ビューティフル・パパは、「おぎゃあ」と泣くかわりに、「てんじょうてんげゆいがどくけん」といいました。みなさんは、この意味がわかりますか？ お釈迦さまは、うまれたとき、「てんじょうてんげゆいがどくせん」といいました。これは、「天の上にいる神さまたち、また、天の下にいる人間たちのなかで、わたしひとりだけがとうといものである」という意味です。「せん」は、「とうとい」ということなのです。ビューティフル・パパは、お釈迦さまのことばの「せん」というところを「けん」といいました。「けん」とはかしこいという意味です。もうわかりますね。そう、ビューティフル・パパは、「わたしひとりだけがかしこくて、神さまである」と、人間であるとうと、わたしにくらべれば、ばかとおなじだ」といったのです。

そばにいたお医者さまは、これをきいて、この赤ん坊はなんて傲慢なんだろう、とおもいました。そこで、ひとつ試してやれと、ビューティフル・パパにこうききました。

「アインシュタインの相対性理論を説明してみろ！」

お医者さまは、どうだ、答えられないだろう、といわんばかりの顔つきです。赤ん坊のビューティフル・パパは、退屈そうにあくびをしました。そして、まだつながったままのへそのおをいじりながら、いいました。

「ごどもでも答えられるような、そんな簡単な問題にわたしが答えなくちゃならんのかね？」

お医者さまも、まわりにいたナースさんたちも、そして、ビュー

ティフル・パパのおかあさまも、これにはあっけにとられてしまいました。

「これこれ、お医者さまにむかって、そんな口をきくものではありません」

おかあさまは怒っていました。さすがのビューティフル・パパも、おかあさまにはさからえません。しかたなく、アインシュタインの相対性理論のことを説明しました。ビューティフル・パパは、ひとこともいいまぢがえることなく、すらすらと答えたので、お医者さまはびっくりしてしまいました。

「申し訳ない。あなたのようなかしこい人に失礼なことをいってしまった。許してくれ」

お医者さまは、自分の無礼をわびました。ビューティフル・パパは、そんなことどうでもいいというような顔でへそのおをいじっていました。

次の日、病院にいるビューティフル・パパのおかあさまのところに、郵便がとどきました。差出人のところには、モスト・インテリジエント大学学長、とかいてあります。おかあさまは、こんなえらい人がなんの用かしら、とおもいながら、封をあけました。なかにはいつているものをみて、おかあさまはぎょうてんしました。博士号の学位状ではありませんか。いっしょにはいつていた手紙にはこうかいてありました。

きのう、あなたの国の文部科学大臣から電話があり、あなたのお子さんのことをききました。お子さんを取りあげたお医者さまが、文部科学大臣のところへ行って、事情を話したそうです。文部科学大臣は日本でいちばんかしこい大学よりも、世界でいちばんかしこい大学に連絡したほうがいいだろう、ということ、当大学に電話されたのです。わたくしたちは、はなしをきいて、さっそく世界のトップレベルの博士たちを集め、緊急博士会議をひらきました。その結果、満場一致で、お子さんに博士号をおくることが決まりました。

た。どうかおつけとりください。

これを読んだおかあさまのおどろきようつたらありません。産まれてふつかめにわが子が博士になってしまつとは！ なにかのまちがいで？ いや、相対性理論のことをうまれながらに知っていたんだから、あるいはとうぜんかも……。わが子は天才にまちがいない。そうおもつと、おかあさまはきゆうにうれしくなってきました。おかあさまはよこでねむっているビューティフル・パパの顔をのぞきこみました。こんな赤ん坊が、お医者さまよりも、えらい学術者さんよりも、かしこいなんてねえ。おかあさまは、ふしぎなようすです。ビューティフル・パパは、そんなおかあさまのきもちも知らずに、へそのあたりをいじりながらすやすやとねむっていました。

これがビューティフル・パパがうまれたときのたのもしいエピソードです。お医者さまのあわてふためいているようすにはおもわずふきだしてしまいますし、おかあさまがビューティフル・パパをやさしくみつめるごようすには心がほかほかとあたたかくなってきますね。

第2話 天才の死

ビューティフル・パパは、すくすくと成長し、人類史上最大の天才になりました。その証拠に、成人するまでにノーベル六賞のうち、五賞を受賞したのです。そのうち物理学賞と文学賞は同時受賞なんですよ（発明した装置の取扱説明書があまりに文学的だったため）。こんなすごいことってあるでしょうか。ノーベル賞を創始したノーベルですらそんなことはできなかったのですから！

ノーベル賞とは、ドイナマイトという強力爆薬を発明したノーベルが創始した賞で、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、経済学賞、文学賞、平和賞の六つの賞があります。ノーベル賞を個人として二つ以上受賞した人は、ビューティフル・パパ以前には一人もいませんでした。そしてこれからもいないのではないのでしょうか。いや、もしかしたらあの人がかかるかもしれません、そのお話はまたあとでしましょうね。

さて、ビューティフル・パパが受賞していないのは、平和賞だけとなりましたが、平和賞受賞も時間の問題だろうとだれもがうわさしました。

ビューティフル・パパは、二四歳のときにおさななじみのビューティフル・ママとできちゃった結婚。ビューティフル・ママは思春期になると「神ですら二度見する」と町内でさわがれたほどの美人だったので、世界じゅうの男の人がうらやましがりました。そうして御令嬢のビューティフル・ガールちゃんが誕生しました。誕生日は十月十日です。

悲しい事件が起こったのは、ガールちゃんもうまれ、東京デラックス大学のワンダフル・プロフェッサーにも就任し、公私ともに充実していた桜の季節のことです。

ビューティフル・パパは、ノーベル平和賞をねらいにいった発明品「イービル・リムーバー」の完成を目前にしていました。イービ

ル・リムーバーとは、人間から悪の心をとりのぞく画期的とも革命的ともいえる装置です。これが完成すれば、世界から悪い人間はなくなり、いままで人類が達成することを夢見て果たせなかつた真の平和がおとずれることになるのです。

ビューティフル・パパはその日、腹心の友のナイス・ミドルに電話をかけました。

「もしもしもし。イービル・リムーバーの試作品が完成したんだが、君で実験することに決定したので今すぐ来てもらいたい」

ナイス・ミドルは手みやげにイチゴシヨートをもつてやってきました。イチゴシヨートはビューティフル・パパの好物なんですよ。腹心の友ならではの心遣いですね。ナイス・ミドルは実験が成功したあかつきにびっくりさせようとおもっていたので、イチゴシヨートのことはだまっていました。けれど、勘のするどいビューティフル・パパです。ナイス・ミドルが部屋にはいつてきたとき「なにかいいにおいがする」とつぶやきました。ナイス・ミドルはあわてましたが、そこへビューティフル・ママがお茶をはこんできたために、そのことはうやむやになりました。

ナイス・ミドルはビューティフル・ママを三度見すると、顔をまっかつかにしながら「どうぞおかまいなく」と息も切れ切れにいいました。実は、ナイス・ミドルも、ビューティフル・ママのおさななじみで気がおけない仲なのですけれど、ガールちゃんをうんでかちますます美しくなつてゆくビューティフル・ママを見ていると、どうしてもたにんぎょうぎになつてしまつたのです。

ビューティフル・ママが実験室から出てゆくと、ナイス・ミドルはなごりおいしいような、ほっとするような、おかしな気もちになつて、ためいきをつきました。けれど、ビューティフル・パパがお茶を飲むひまもあたえず「では実験をはじめよう」とおごそかにいったので、ナイス・ミドルの体にはまたしても緊張がはしりました。なんととってもこれは人類に真の平和をもたらす歴史的な第一歩なのです。

ナイス・ミドルはそう考えると、すこしこわくなってきました。ビューティフル・パパはそんなことにはおかまいなしにイービル・リムーバーの電極をナイス・ミドルの体にとりつけてゆきます。ナイス・ミドルは緊張で体がぶるぶるとふるえてきました。そこで、そんなに急いで実験せずとも、まずきみの奥さんがいれてくれたおいしいお茶をいただこうじゃないかと提案しましたが、ビューティフル・パパの表情はくらくらいままでした。

ちやくちやくとイービル・リムーバーのセッティングはすすんでゆきます。ビューティフル・パパが単三の電池を電源部分にいれようとしたりしたそのときに、ナイス・ミドルは緊張にたえられなくなつて「実は、イチゴシヨートを買つてあるんだ」といつてしまいました。こういえば実験がいったん中止されるとおもつたのです。ビューティフル・パパはその言葉を神の啓示であるかのようにきくと、おおあわてで電池をとりつけ、ナイス・ミドルが指さしている紙袋にとびつきました。いままでのきびしい表情とはうってかわつて、あかるくほほえんでいます。

「なぜそれをはやくいわないのだ！ さっきのいいにおいはこれだったのだな！」

ナイス・ミドルは胸をなでおろしました。これで小半時間は実験が先のばしにされるだろう。そのあいだに心の態勢をたてなおそう。そうかんがえたナイス・ミドルは体にとりつけられた八本の電極をとりはずそうとしましたが、ビューティフル・パパに制止されました。

「またつけなおすのは面倒だからそのままにしておこう」

あてがはずれたナイス・ミドルは、電極をつけっぱなしにしてイチゴシヨートを食べるはめになりました。ナイス・ミドルがぐくりとうなだれていると、ビューティフル・パパは二口ほどでイチゴシヨートを食べつくしてしまい、

「うまい！ イチゴシヨートはうまい！ 一番まずいイチゴシヨートですらうまいー！」

と、腑におちない理屈をいって、イチゴショート好きを遺憾なく発揮しています。そうしてすぐに、

「さあ、実験を再開しよう」

とビューティフル・パパは無をいわせぬ口調でいいました。ナイス・ミドルは一口も食べていません。

「なんだ、まだ食べていないのか！」

ビューティフル・パパはいらいらしたようすです。ナイス・ミドルはおっかなくなつて

「僕は実験がおわつてから食べるからあとでいいよ」

といつてしまいました。ビューティフル・パパは軽くうなずいて、イチゴショートをとりあげ、机の上におきました。ナイス・ミドルは心の準備がまったくできていませんでしたが、もうやぶれかぶれです。どうにでもなれとやけくその決心をして、大きく息をすいませました。

「では、この赤いスイッチを押すぞ。このスイッチを押せば、きみの心から悪の心はなくなり、かんぜんな善人になるのだ」

「よ、よし、やってくれ」

ナイス・ミドルの声はかすかにふるえています。ビューティフル・パパはするどい目つきで赤いスイッチを見つめ、人差し指に力をこめました。

イービル・リムーバーからしずかなモーター音がきこえてきます。窓の外には、さくらの花びらが舞っています。

ナイス・ミドルは、散つてゆくさくらの花びらを見て、ほのかな無常感にとらわれました。わたしもあの花びらのようにはかなく人生を終えるのだろうか。わたしは生まれてからつねにビューティフル・パパの後塵をおがんできた。ビューティフル・パパは生まれてすぐに相対性理論を説明したけれど、わたしが相対性理論を理解したのは七歳のときだった。ビューティフル・パパがノーベル賞をとったとき、わたしは審査員特別賞や研究奨励賞などのつまらない賞しかもらえなかった。ビューティフル・パパは「人類史上最高の天

才」ともてはやされたけれど、わたしは「人類史上最高の秀才」と愚弄された。そしてなによりもくやしいのが、わたしもおさななじみであるビューティフル・ママをとられたことだ。しかもできちゃった結婚などというふしだらなしかたで！ くやしい、くやしい、くやしい！ そして憎い。おれはやつが憎い。いくら憎んでも憎みたりない。このままやつの背中を見ながら死んでしまうのはいやだ！ そうだ。やつこそ死ぬべきなのだ。そうすればおれが地球上で最強の天才になれる。おれはやつをころす！

机におかれたイービル・リムーバーの装置から黒いけむりがたちのぼっています。異変に気づいたビューティフル・パパはびつくりして、目盛りを見ました。目盛りはマイナスの方向に大きくふれてマイナス九〇をさしているではありませんか！ これは善の心が減っていった、悪の心が九〇パーセントをしめているという意味なのです。これは一大事です！

ビューティフル・パパのえいびんな頭脳はすぐにこの原因がわかりました。さつき単三の電池をとりつけようとしたとき、ナイス・ミドルが手みやげのイチゴショートのことを

告げたため、ビューティフル・パパは大好きなイチゴショートに気をとられて、電池のプラスとマイナスを逆にしてしまったのです。だから、イービル・リムーバーは、悪の心をとりのぞかずに、善の心をとりのぞくよう作動したのです。

「きみがイチゴショートのことなどいうからだぞ！」

ビューティフル・パパはオフのスイッチである青いボタンを押しながらさげびました。でも、電源はぜんぜんオフになりません。回線の一部がショートしてしまっ、いうことをきかないのです。目盛りはだんだんと下がっていきます。マイナス九四、九五……。

ビューティフル・パパは電池をとりはずそうとしましたが、ものすごい高熱を発していてさわることさえまなりません。マイナス九六、九七……。このままだとナイス・ミドルはかんぜんな悪人になってしまいます。はやくイービル・リムーバーをとめなければ！

ナイス・ミドルは実験台の椅子からおもむろにたちあがりました。きょうあくな目つきでビューティフル・パパをにらみつけると、両手を自分の顔の前にもってきました。ボクシングの基本姿勢です。言い忘れていましたが、ナイス・ミドルは世界ボクシング大会で準優勝の経験があるのです。じゃあ優勝はだれかって？ もちろん、ビューティフル・パパです。

ビューティフル・パパはイービル・リムーバーに気をとられていて、ナイス・ミドルの行動にまったく気づきません。目盛りは下がりにつづけます。マイナス九八、九九……。

そうだ、電極をとりはずせばいいのだ！ そう気づいたビューティフル・パパは、ナイス・ミドルのほうをふりかえりました。ナイス・ミドルは強烈な右ストレートをくりだします。ナイス・ミドルのこぶしがビューティフル・パパの顔にあたつたかあたらなにかくらの瞬間でした。イービル・リムーバーが雷がおちたような轟音をたてて爆発をおこしたのです。同時にビューティフル・パパの頭ははれつし、のうみそがあたりにとびちりました。

ナイス・ミドルは笑いました。大きな声で笑いました。体の奥底から快感がわきあがってくるようなおそろしい笑いかたでした。ひとしきり笑いおわると、ナイス・ミドルは机のうえにおいてあったイチゴショートをわしづかみにし、一口で食べてしまいました。それにはビューティフル・パパのうみそがちよっぴりついていましたけれど、そんなことは関係ありませんでした。

食べおわると、ナイス・ミドルはそのまま気絶してしまいました。ドアのむこうでは、ビューティフル・ママがびっくりしてかけつけてくる足音がしています。

ビューティフル・ママは実験室のドアをあけました。なかは滅茶滅茶にあれていて、何がおこったのかさっぱりわかりませんでした。ただ、ひとつだけすぐにわかったのは、イービル・リムーバーの目盛りがマイナス九九・九をさしていることだけでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8816b/>

正義の味方ハンサムボーイ

2010年10月17日02時30分発行